

士族授
産会社 四山社と旧直入郡の蚕糸業(下)

鳥 養 孝 好

五 工場の施設・設備

四山社創立から直入製糸場の終末にいたる間は推定で二八年間である。この間、工場立地の変更や、蒸気罐の採用、繰糸釜の増設・縮小など多くの変遷を経ているが、いくつかの点についてふれてみたい。

1 水力繰糸

大分県下の製糸場で一八八〇年代から一九〇〇年代まで繰糸動力に水力(水車)を使い続けるのは四山株式会社とその後身である直入製糸場のみで、極めて特徴的である。重複をいとわずしこの問題を追究してみたい。

当地において繰糸に水車を利用した嚙矢は馬淵小源治である。⁽¹⁾これが四山社以下に引継がれてゆく。年次を逐ってみたい。

文久年間 馬淵小源治 会々村下木に水車による箱車座繰

一八七六 馬淵ら 下木の県有米倉に製糸場建設(水車利用か。一八七七焼失)

一八七八 馬淵ら 吉田村下恵良に製糸場(繰糸組 水車利用か)

一八八三 吉田村下恵良四山製糸場の水車利用初見

一八八五 製糸場裏丁に移転 水車利用

一八八九 蒸気罐設置計画 立地候補地視察、水利を条件

一八九二 蒸汽鐘設置・水車利用

一九〇七 直入製糸場 動力水力(水力最終史料)

さて、この繰糸の水力利用はどのようにして始まったのであろうか。長野県下の繰糸に水力利用が盛んなことはつとに知られているが、四山社以前に当地で養蚕・機織を指導したとする人びとの多くは信州出身者とされ、一八九二年の蒸汽鐘設置・器械新設を指導したのも、長野県技師井上清次郎である。水車利用に詳しくあったための人撰でもあろうか。県下の水車利用は一八九三年段階では三社が水車利用とされ、その創業年・所在地とともに掲げた⁽²⁾。

四山社株式会社 一八八一 直入郡竹田町裏丁

大分製糸場 一八八六 大分郡在限村三芳

理繭社 一八九二 宇佐郡和間村

ところで当地の水車利用製糸の発想は、農業用水車技術の蓄積があったという見解が提示されているが、別の観点、つまり、器械動力としての水車利用の流行という面からの検証を加えてみたい。

まず、旧藩時代の水車についてみると、実態はともかく、史料はごく少ない。唯一の例は嘉永六年正月に創められた水車に関する記録である。筆録者は渡辺⁽⁷⁾性とあり、郡方の役人かもしれない。内容は水車の設置願とその見分の記録である。おそらくは水車に対する運上の徴収と、その設置場所が本田畑の中にないかどうかを見分するためであったと思われる。記録は三件のみに止まっている。なお、他の史料では動力源・揚水のいずれか不明確である。

有氏組石原村 嘉永六年(一八五三)

葎原組新藤村 文久二年(一八六二)

片島組荻田尾村 慶応二年(一八六六)

この水車はいずれも摺臼・春臼とあり、精米業であったが、一三年間に三件の新設にすぎない。しかし、文久年間の馬淵小

源治による会々村下木での水車を動力とする箱車座繰と同時代すでに精米・製粉業が各地に点在していたらしい事を知ることができるのである。⁽¹⁾

廃藩置県以降は、竹田町町内通水・稲葉川通船・竹田水電会社と深いかかわりがあるように思われる。町内通水計画は、旧藩時代以来、城下町二〇〇〇餘戸の防火対策として再三の通水が計画されていたが資金手当などで常に挫折を味わっていた。なお、稲葉川通船事業の計画は、一八七五年に伊東金十郎らを中心として、瀑布については掘り割りや迂回路の開削、川浚えによって航路が設けられ、一八七九年に四山社と並ぶ開産会社が創立されると、通船事業はここが管轄し、川回漕をひとつの業としている。⁽²⁾

この町内通水事業および通船の水量不足、濁水を補うため、佐藤唯平が中心となって、大分県権大属小原正朝(岡藩士族)の示唆をうけ、一八八〇年、開産会社の資金を割き、阿蔵川の水を隧道を穿って竹田町に通水をおこない、稲葉川に放水することとし、町内有志の寄附金を集めて起工、翌年本町筋への通水に成功し、一八八五年に到って上町・田町・新町への通水が完成している。⁽³⁾

更に、一八九九年に黒野猪吉郎を中心に竹田水電会社が設立され、町内通水を拡幅によって水量を増し、第一発電所を建設して一九〇〇年に点灯している。この水力発電は九州第二番目という画期的な事業であるが、町内通水および発電事業の結果、一九〇三年時点で点灯以外に次のように利用されている。⁽⁴⁾この中で町内の水車による精米は一八八一年に遡るであろう事は推測に難くない。

電気にて 精米 老人 刻煙草 貳拾人

水車にて 精米 拾九所(二〇人)

さて、一八八三年、四山社の吉田村下恵良製糸工場は水車利用が明確で、その源は一八八一年の四山社創設を遡り、一八七八年の繰糸組に発するとしてよいが、その土地は「財産評価書」によれば、直入郡大字吉田字下恵良の二八四番地から二八

八七番地の点在する畑地・原野で、その中の二八六六番地は宅地⁽⁸⁾であった。この土地は大字吉田字恵良集落の東方で、大野川本流が大きく蛇行して舌状となった隔絶した土地で、今なお訓練場・御茶屋ノ下などの俗称が残っており、馬淵小源治らが旧訓練所の払下げをうけて養蚕をおこなったとする土地と一致する。宅地は蚕室の所在地であり、更に繰糸組から四山社製糸場の立地であり、製糸場の裏丁移転後は桑園管理の物置が所在していたことは確かであろう。

そしてこの舌状地の上流部に井堰を設け、舌状地のほばなかばほどを斜断する隧道を穿って通水し、現在は埋没してはいるが二八六六番地の端に堅穴を掘って水車を架設した特異な構造となっており、後に同場所に設けられた水車は巨大なもので、一九三〇年代まで地域の精米用水車として利用され、下流に放水されていたし、その水車用の亜鉛板水罐が一点保存されている。こうした通水隧道・水車を精米用のみに作ることはあり得ないので、この隧道・水車の位置がかったの繰糸組から初期四山社製糸場の遺構であるとして誤りはないであろう。

なお、同地では、後に下恵良に土地を所有することになった家では、祖母からこの土地の桑は地元の人びとが雇われて裏丁四山社に運んでいたと聞かされていた⁽⁹⁾。ところがこの土地は、一九〇二年以前にすでに四山株式会社の手を離れ水田化されたらしく、「財産評価書」に登録されながら抹消されており、また、恵良から下恵良に通ずる道路側に、明治三十五年(一九〇二)の磨崖通水記念碑がある。

2 蒸気罐

繰湯や器械の運転に蒸気罐を使用する繰糸は全国的には一八七二年の群馬県富岡製糸所をその初とし、長野県では、松代の士族授産会社六工社は一八七二年に繰湯を蒸気罐で、器械運転を水力で操業を開始し、一八八六年段階では五一七工場中、三七六が煮繭用汽罐を有している⁽¹⁰⁾。

大分県では大分郡在隈村の大分製糸場を最初とする。一八八六年、大分県は五〇釜・繰湯を蒸気・動力を水車とした模範工場を建設し大分製糸場に貸付けたもので、一八九三年段階でもまだ、県内二三社中で繰湯を蒸気とするもの四・器械運転はわ

ずかに二に止まっている。¹²⁾

四山社の蒸汽鐘の設置は、大分製糸場の建設に次ぐ一八八八年に発想され、翌年に株主の主だつ者の内会に提案されて早速に新工場候補地の撰定が開始され五か所の土地があげられるが、最終的には二か所に絞られてゆく。この過程ではその関心は水利が中心で、蒸汽鐘にはさほどの関心が払われていない。そして、「新築一条ハ興廢ノ決スルニ付、充分ノ密調ヲ要スル」という空気であったと思われる。この慎重さは資金調達の問題ではなかつたであろうか。¹³⁾

一八九一年一月に開かれた臨時会でも同様ではあるが、次第に蒸汽鐘そのものに目が及び始め、三重県宝山製糸所の見学を決定している。一〇月に入ると取組みは具体化され、長野県技師井上清次郎を招いて指導をうけ、臨時会が招集されて株式の増募(による資金調達)が定められ、一月には蒸汽鐘設置と製糸場等新築のための監督員・新築相談員が選ばれ、小野惟一郎も招かれて会合、その席で小野惟一郎の提案で、蒸汽鐘購入のために役員一人(斎藤)が上阪することとなった。

十二月十二日未明に、場所は明確ではないが、甲斐九郎は宿舍の二階(多分直入郡役所)にあって、斎藤・小野が帰着して訪れたのを知り、階下に降りて、神戸・大阪・西京での買入れの詳細を聞いている。更に同二一日には、繭蔵の完工と、蒸汽鐘の据付けは井上清次郎の指導のもとで大阪から来た職工五名の手で進行中であるとしている。¹⁴⁾

一八九二年四月九日、前年に株式会社化した四山株式会社は、その操業に先だつて総会を開いて、経費の償却・井上清次郎への賞与・開場式の件を提案するが、そのほとんどに修正が加えられ、最終的には次ぎのように決定している。

経費の償却 資本金で支払い、積立で償却

賞 与 生糸半括を贈呈

開 場 式 有志自弁の祝宴 招待客は交際費から支出

こうして完成された新工場は、四月二五日に開業式が挙行されている。この日は、新器械による繰糸をおこない、工場を公開した後、煙火を合図に式典をおこなつて祝宴が開かれている。¹⁵⁾

操業を開始した蒸気鐘は一八九六年に汽鐘室の建継がおこなわれているので、当初から汽鐘室を併っていたとしてよいが、蒸気鐘の能力は一八九四年に次のように見える。⁽¹⁶⁾ 関係深い大野製糸の資料を加えたい。

四山株式会社

資本金 四、四三〇円

職工 七六名(工男他を含むか)

蒸気鐘 数一 八馬力(繰湯のみ)

大野製糸合資会社(大野郡千歳村)

資本金 五、〇五〇円

職工 三七名

蒸気鐘 数一 四馬力(繰湯・器械運転)

この蒸気鐘設置時の釜数四〇、一八九四年の推定五〇釜、一八九五年六〇釜、一八九六年九〇釜とその繰糸釜数を拡大するが、設置当初から規模の拡大を予定した能力の設定であったことが確実である。

また、この蒸気鐘は一八九六年の九〇釜増釜にあたって据付け直しがおこなわれ、同時に石垣も修築された。

更に、一八九九年には、斎藤が大阪で新汽鐘購入の打合わせをおこない、次のように甲斐に語っている。⁽¹⁷⁾

(マイ) 機関ハ巴二八年ヲ経過ス。多少ノ損シアリ。之ヲ賣却シテ新ニ買入レント其理由ヲ述フ。新調ニハ千数百円□□ヘシ。

この後、蒸気鐘に関する記事は今のところ見当たらない。発掘された蒸気鐘の側からの検証に期待したい。

発掘された四山株式会社(直入製糸場)の遺構、特に建造物群の文献からの検証は困難を極める。というのも、時期によって変転が多く、配置もまた明確にできる例は少ないためである。従ってここではその概略について述べてみたい。

一八八一年、四山社創立当初は吉田村に所在した旧繰糸組の施設・設備がそのままに受け継がれた事に相違ない。水車の項でも扱ったようにこの工場は、吉田村下恵良の二八六番地の宅地が該当し、ここには御牧百人が居住して桑園を経営し、養蚕・製糸をおこなわせ、一八八四年の一年間ではあるが、養蚕試験所・伝習所も設置された事があった。この製糸場の動力は一八八三年を初見とするが、すでに水車を利用しており、用水は大野川本流に井堰を設け、隧道を穿って通水し、堅穴を掘って水車を設けていた事を前述しておいた。

繰糸規模は繰糸組の六釜から、一八八四年には工女数からの推定であるが、一〇釜ほどの規模であつたらうと考えられるから、せいぜい一・二棟以上の建造物は必要ではなかつたと思われる。

同年、社長上島龍記、そして上島の発病によって急拠後を継いだ大野恒徳の手で裏丁移転が実行されるが、その土地は竹田村字裏丁一八八五番地、則ち中島滝右衛門の宅跡が撰ばれたもので、その地番及び敷地の状況は古地籍図で明らかにすることができる。⁽¹⁹⁾

この新しい裏丁四山社の施設について見ると、一八八五年の操業期には移転を完了しており、前年とともに工女数を一五名とし、一〇釜程度の規模で、またともに器械運転の種類を水力(水車)とすることが知られる程度で、詳細を明確にする史料に乏しい。

一八八八年に到って、工場のある程度の建造物を確認することができ、史料が残されてくる。この年に、四山社を会場として、大野・直入両郡連合第一回共進会が開かれるが、その「報告書」に会場の概念図が収められている。古地籍図によると、四山社構内は竹田村裏丁一八八五番地で丁状となっており、古町通りから裏丁に入ると丁状の角の部分にいたり、正門に入る

と右手(南)に事務所と土蔵が続き、正面(東)に二階建の二棟が左右に並んでいる。おそらくは工女室・養蚕室でもあろうか。更にその奥に(丁)の下端部・稲葉川に接する)に平屋建の二棟が縦に並ぶが、このいずれかを繰糸場とすることができよう。²⁰⁾

次いで一八九一年、蒸気罐の設置および諸施設の改・新築が開始され翌年に完工を祝う開業式がおこなわれ、一八九三年には四〇釜であった事が明確であるが、この時期に知ることのできた諸施設は次のとおりである。

井堰・石垣・水車路

水車場屋根・水車

汽罐室・蒸気罐

薪置場屋根(一八九三年改築 長一四間・幅一間半)

繭蔵(一四間・四間)

殺蛹所(新築)

製糸場・器械(改良)

揚返所

焙爐場(建継・二間四方)

蚕種検査場

蚕室

食堂(賄所)

雪隠

(井戸)ポンプ

板塀

更に、一八九六年から一八九八年の間の九〇釜体制のもとでの建造物群をかかげたい。これは、一八九六年の財産目録に、家屋拾七棟、貳百八拾八坪二合とある内容を中心とし、ただし蚕室・工女室兼事務所・物置は一八九七年の火災後、一八九八年の再建である。

堰樋・通水路

(水車)

蒸気室(建継)・蒸汽罐

薪置場(新築)

乾燥室(新築) パヒブパヒブ設置)

貯繭蔵

製糸場(建替) 製糸器械三〇座増築)

揚返所

焙爐

倉庫・土蔵・物置(焼失再建) 平屋土蔵作一棟 桁行四間、梁行參間)

食堂(建継)

蚕室(焼失再建)

事務所兼工女室(焼失再建) 二階建一棟 桁行四間・梁行三間)

水溜(二ヶ所)

学校(養蚕生徒委託)

(下)恵良桑園物置

最後に学校についてふれておきたい。その嚆矢は一八八四年の吉田村下恵良の養蚕試験所・伝習所であるが、一八八五年に工場とともに裏丁に移転し、以降、直入郡役所から養蚕生徒委託金を交付され、一八九四年に郡役所農商係の甲斐九郎が養蚕生徒募集のため、各町村に出張している。

この養蚕伝習所は一八九七年に別場所に設立されたいし直入郡蚕糸組合・養蚕伝習所に受けつがれたが、一八九八年に四山株式会社では前養蚕試験所の養蚕を、工女四・五〇名を寄宿させて養蚕にあたらせ、一八九九年には養蚕を更に継続する決定をおこなっている。蚕種製造が主目的であったようである。

注

- (1) 『大分県乃蚕糸業』 大日本蚕糸会大分支部編 一九一三
- (2) 『大分県第五回年報』 一八八二および『大分県統計書』 一八八五―八七による
- (3) 『大分における近代企業の形成 養蚕・製糸企業 四山社』 松尾純広 大分大学経済学部『経済論集』 四六一―六 一九九五
- (4) 「年々留 水車一件」 渡辺姓 一八五三―一八六六 竹田市立歴史資料館蔵
- (5) 「直入郡誌料第二十四」佐藤唯平伝 直入郡役所編 一九〇三および『開産株式会社史』 鳥養孝好 一九九六
- (6) 注(5)の佐藤唯平伝に同じ
- (7) 注(6)に同じ
- (8) 吉田村古地籍図 年未詳 竹田法務局蔵
- (9) 阿南二夫氏 大字吉田字恵良 一九二二年生
- (10) 『器械製糸用汽罐製造の展開』 史学会『史学雑誌』第一〇一編第七号 鈴木淳 一九九二
- (11) 『大分県史』近代編I 富来降編 一九八四

- (12) 『第一回全国製糸工場調査表』 農商務省農務局編 一八九四調か
- (13) 甲斐九郎「秘密摘要日誌」 一八八九 甲斐一郎氏文書
- (14) 甲斐九郎「毎日摘要記」 一八九二 甲斐一郎氏文書
- (15) 「会社一件」および注(14)に同じ
- (16) 『明治二十七年大分県統計書 全』 大分県編 一八九五
- (17) 甲斐九郎「當用日記」 一八九九 甲斐一郎氏文書
- (18) 「直入郡漫筆録」渡辺村男 年未詳 竹田市立図書館蔵
- (19) 竹田村古地籍図 年未詳 竹田市役所蔵 この地籍図は竹田村・竹田町の、会々村・飛田川村合併以前に作成され、同図中の貼紙に「四
十三年字図訂正願済」と見えるので、四山社から直入製糸場の存続した時期のものとしてよい。
- (20) 『大野・直入両郡連合第一回共進会報告』 一八八八

六 四山社の特徴とその背景

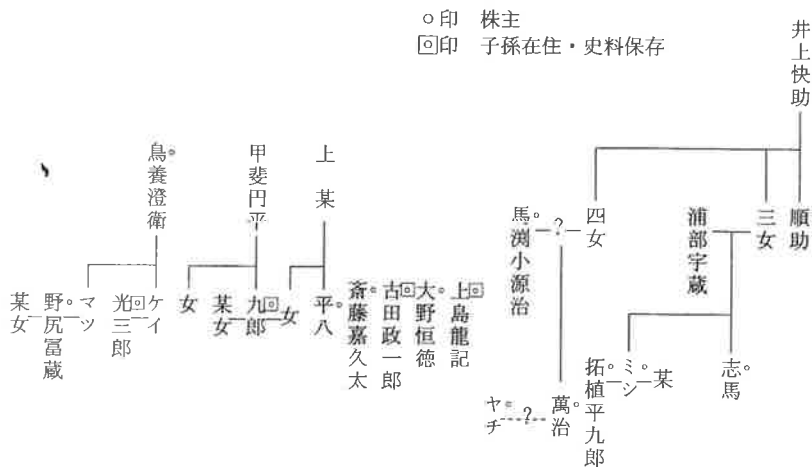
さて、四山(株式会社)社はその特徴として論じられてきた事が二点ある。第一点は士族授産会社が早く転退する中で、長期にわたって存続し続けたこと。第二点は地域産業(製糸業)の先導的役割を果たしたことである。しかしその論証はさして明確になされたとはいえない。ここで少しこの問題にふれて見たいのである。

1 士族と蚕糸業

四山社は繰糸組をもとに士族授産会社として、授産資金の貸与と、士族から株式を募って創立されたものであるが、当初の定款・株主名簿は未だ発見できていない。

しかし、一八九一年の株式会社化直前の株主名簿・株式会社化当時の定款が残されている。この定款は、おそらく事務所の

図表6 旧岡藩の養蚕・製糸・機織関係者縁戚図



位置と社名を除けば創立当初の定款と大差はなかったものと考えられ、また、株主名簿に見える一二一名の株主は、相続や売買による多少の変動はあると考えられるものの、これまた大差はなかったものと考えられる。おそらく、一八九三年と考えられる株主名簿では、旧株と増株による新株の別があり、個々の増株や多少の新株主、そして旧株主の近親女性の株取得などがあって一五五名となっているが、ここでも基本的変化は認められない。

さて、これまでに前号で紹介した関係者の主だった人びとについて見ると、井上快助・浦部宇蔵を除けば、そのほとんどを株主名簿の中に見ることができるとして、四山社の株主・特に経営に主要な役割を果たした人びとは、相互の婚姻関係によって結ばれたいくつかの血縁集団をなしているものと考えられることができるようである。これは近世封建制が、同格式間の婚姻が一般的で、中・下級士族に属する同社株主にとっては当然の事でもあったわけであるが、しかしまた、その中核をなしているのが、当地の蚕糸業の鼻祖と称することのできる井上快助に連なる集団の活躍がめだつ事である。縁糸組・四山社創設に深くかかわった馬淵小源治・浦部志馬はこの集団に属しており、更に調査を進めれば、相互の関係は更に密となるであろう。こうした血縁関係を中心とした人間関係が結束を強化していったものとする事ができるかもしれない。

次に四山社にかかわった主要人物たちは、いずれも早くから養蚕に取り組み、手繰・座繰、場合によっては小規模な機械製糸に取り組み、染色・機械に到るまでの家内制手工業から小規模ながら工場制手工業段階まで、較差はあるものの、一貫して自己完結型の生産をおこない、これを自から「専業家」と考え、農民の養蚕を「副業」として区別していた。

更に、四山(株式会社)社の取締役・監査役となる人びとや主な株主は斎藤を始めとして、自己完結型の専業家であり、養蚕・製糸には充分の知識を持ち、いわゆる一家言を持った自立性の高い人びとであり、これが一八九二年の定式総会・一八九八年一月の臨時総会に代表されるように提出議案が大幅に修正されているという状況を生み出すものとなっている。関係者にはこうした蓄積・識見があつたものとしてよいであろう。

次いで当地方の養蚕の拡大は、土族をして四山社と関係が深い。養蚕・製糸の奨励は国策として県庁・郡役所でも力を注ぎ、その第一線が郡役所であつた。飛田川村出身の上平八は大野郡役所勸業主任に招かれて養蚕を發展させ(後、大分県蚕業組合副組合長)、挟田村出身の甲斐九郎は直入郡役所農商係となつた(後に四山株式会社再建に努力)などを代表とする。

また、四山社関係者は郡役所の支援のもとに、養蚕試験所・伝習所、あるいは巡廻教師を勤め、一八九六年創立の直入郡蚕糸業組合立養蚕伝習所の教師も同様であつたであろうと思われる。

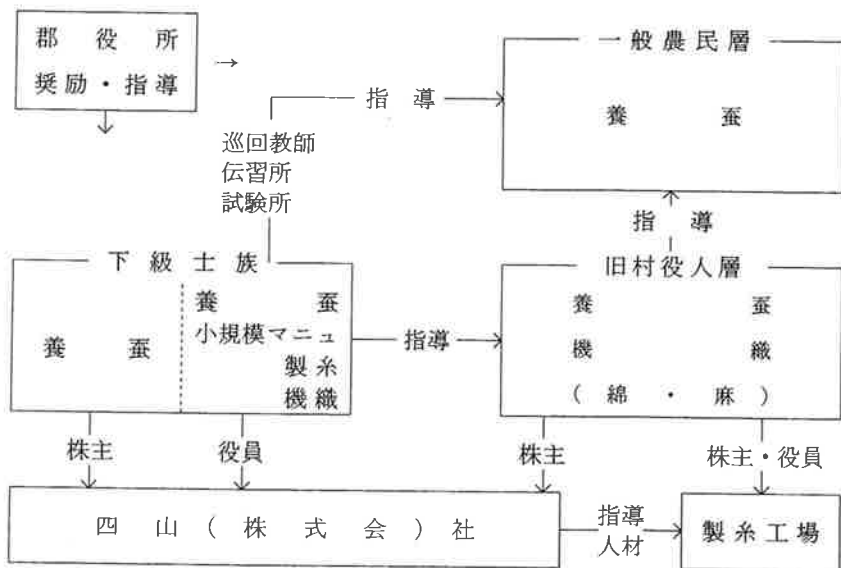
この農民に対する普及活動は、四山社関係者にとつては原料繭の確保手段であると同時に、彼等にとつては旧岡藩領を念頭においた養蚕から製糸にいたる自己完結型の一貫生産が最終目標であり、あいにく増釜は己の養蚕奨励の努力の結果である繭生産の増大に対応するものという意識があつたとしてよいであろう。こうした諸点が四山(株式会社)社の發展を支え、また弱点ともなつたのかも知れない。

2 農民の養蚕・製糸

農民の養蚕については既に取りあげた所であるので簡単にまとめ、その製糸会社についてのべてみたい。

農民は旧藩時代に真綿上納制度などがありながらも養蚕に取組む例は少なく、一八六〇年、村役人の桑の草取りなどが僅か

図表7 四山社をめぐる構造概念図



な確実例である。廃藩置県そして四山社創立以降に最初に取り組みを始めるのは旧村役人(町村長以下村の指導者)で、篤農家でもあった。彼らは勸業会・集談会に出席して交流をおこなって技術を高め、地域農民に範を示しつつ、郡役所の養蚕奨励策を現地で指導する立場にあった。

そして、四山株式会社が増株について特に一八九五年以降にこれに及び、一九〇二年の株主名簿に多くその名を見ることが出来る。その代表が四山株式会社再建にかかわった大津音一、古庄敬一郎らである。

更に、養蚕の普及と四山株式会社の発展は、大野・直入郡各地に農民出資の製糸場の建設を促してゆく。これら四山株式会社に続く製糸会社はどのような状況のもとに設立・運営されていったのであろうか。結論を先に述べるならば、旧村役人層を中心として株式発行し、役員は四山社以来の関係者を招く例や、指導を仰ぎ、具体例は確認できていないが工女の技術伝習、あるいは譲渡をうけ、時には引抜きもあつた可能性も高い。

以下、大野・直入郡の製糸各社を簡単に紹介してみたい。

大野製糸合資会社 大野郡井田村に所在した。一八八〇年の馬

淵小源治による桑苗販売以来、旧同藩内ということで四山社とも関

図表8 旧大野・直入郡の製糸工場(釜数)

会社名	所在地	創立	1893	1896	1900	1905	1907	1911	終末年
四山株式会社	直入郡竹田町	1881	40	90	90				1904
直入製糸場	同上	1904				60	60		1909か
大野製糸合資会社	大野郡井田村	1893	40	25	50	50	70	70	1942
久住製糸合資会社	直入郡久住町	1896			30	22	22		未詳
豊後製糸合資会社	大野郡牧口村	1897			51	50	50	50	1929
三重製糸場	大野郡三重町	1900				26	26	26	1918
不二株式会社	大野郡小富士村	1901				34	34	34	明治 末年

「全国製糸工場調査表」など

係が深い土地である。工場は一八九三年に創業、関係者として幸大八・宮成米作・広瀬健作らの名があげられているが、一八九六年に後藤体の名が見える⁽²⁾。彼は一八九一年の四山社株主名簿に見え、あるいは役員を勤めた経験を持って、いる可能性が高い史料もある。なお、同社は後に一九二三年に豊国製糸、一九二四年に肥後製糸井田工場となつて、一九四二年にその生命を終るが、大野・直入両郡で最も長期にわたつて繰糸をおこない、その最盛期は一九三九年であつたとされる⁽³⁾。

久住製糸合資会社 直入郡久住村に所在した。この土地は大野恒徳が村長として養蚕の普及をはかつて以来、竹田町・豊岡村に次ぐ産繭量をほこる土地となり、これを背景として、旧細川藩御茶屋跡に工場が設立され、その中心は渡辺弥熊であつた。一八九六年の開業式では、四山株式会社斎藤嘉久太に設立功労者として感謝状が贈られている⁽⁴⁾。

豊後製糸合資会社 大野郡清川村に所在した。一八九七年の創業とするが、前年に開かれた大分県製糸家通常会に同社から野尻富蔵が代表として出席し、一二月二三日に開業式がおこなわれ、社長は日小田長四郎となっている。野尻は四山株式会社取締役の経験を持ち、日小田も一八九一年以来の株主であり、野尻同様の経歴の持主であるかも知れない。四山株式会社と後発の会社との関係を証明できる好例である⁽⁵⁾。一九二二年に豊国製糸に合併された。

三重製糸場

大野郡秋葉村に所在した。この土地は早く大野郡役所に招か

れた上平八の奨励・指導によって養蚕が進み、一九〇〇年に佐藤伊吉によって工場が設立されて一九一八年まで存続し、その建造物が今日に残っている。⁽⁶⁾

不二株式会社 大野郡小富士村に所在した。一九〇一年の創業とするが、別の資料では一八九九年の創立で、小富士村大字片ヶ瀬字柄々の(旧)隧道東に二階建の事務所兼宿舍・繭倉庫・製糸場を設けていた。関係者として、社長児玉琢磨(一九〇二年四山株式会社株主)の他、甲斐健次郎・後藤仙次郎・深田才次郎、汽罐士稲村忠平の名が残っている。その解散は一九〇六年で、敷地・家屋・機械・器具などは後藤仙次郎の所有になったとする。⁽⁷⁾しかし、以降も社名が富士製糸所として残ったものの、一九一一年調べと思われる統計には生産の記録は残っていない。⁽⁸⁾後藤仙次郎による繰糸の実見と終末年の推定は聞き取りによっている。

注

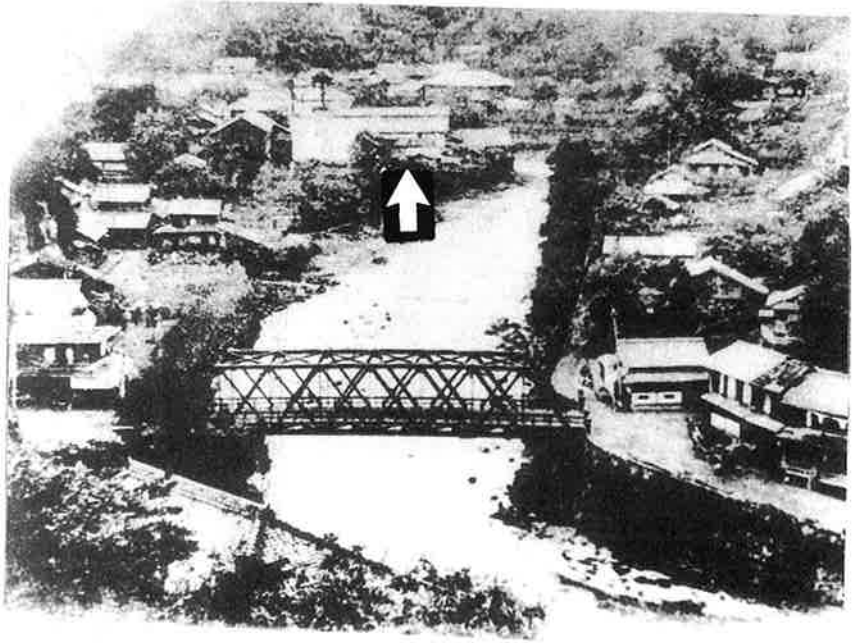
- (1) 「四山株式会社株主名簿写」 一九〇二 甲斐一郎氏文書
- (2) 『勸業』第四二号 大分県勸業会編 一八九六
- (3) 『千歳村誌』 千歳村誌刊行会編 一九七四
- (4) 『勸業』第二八号 大分県勸業会編 一八九六
- (5) 『勸業』第三二号 大分県勸業会編 一八九七
- (6) 『旧三重製糸所』 松尾純広 大分県教育委員会『大分県の近代化遺産』 一九九四
- (7) 『第四次全国製糸工場調査表』 農商務省農務局編 一九〇五調か
- (8) 『続緒方町誌』 波多野政男編 一九五八
- (9) 『第六次全国製糸工場調査表』 一九一一調か

この研究への取り組みは、関係史料の発掘に全力をあげる事から始まったが幸いにも人間関係に恵まれ、特に大量な甲斐一郎氏文書・大津京介氏文書等に遭遇することができ、また、関係者・関係地を踏査して貴重な証言を得る事に成功した。こうした取組みの中で、偶然にも四山社と士族授産資金で兄弟の関係にあたる開産会社(開産株式会社)が現在なお存続し、創立以来の史料の一部が保存されていることを知った。これはまさに驚愕の文字の以外にないので、本稿と並行して社史を執筆しておいた。

明治十四年(一八八一)の同社株券に見る取締役は、吉田肇・伊東金十郎となっており、吉田は授産資金申請一二〇名の筆頭で、四山社株主であり、四山株式会社の監査役をも勤めている。伊東は大野川上中流川回漕舟路の開設者のひとりである。

さて、本稿は四山社の淵源を四山社以前に求め、井上快助・馬淵小源治、そして繰糸組についてふれたが、『大分県乃蚕糸業』中に見える武藤某の「養蚕手はじめの記」によるとされる馬淵・繰糸組の水車利用製糸は極めて疑問の目で見えていなかった。しかし、吉田村下恵良の四山社の故地を訪れ隧道通水による水車を知るに及んで、初期四山社から繰糸組の、更には確証はないものの、馬淵の会々村下木の水車利用の箱車座繰糸すらも信じうる可能性を高めるにいたったのである。

また、四山社の創立にあたって、関係者の縁戚関係、特に井上快助に連なる関係は、女性の持つ役割が極めて大きいことで、男性は養蚕から機械にいたる小工場の経営に当り、女性は養蚕・製糸・機械の技術によって家計を支え、あるいは結婚してその技術を婚家に伝えていることである。その中で、拓植(浦部)ミシは夫の没後も工場経営を維持し、その技術の伝習をうけた女性たちも小工場を持つに到ったとされる。更に四山社の製糸について見ると、大分の製糸伝習所あるいは遠く富岡製糸場に学んだ女性たち、総師婦・師婦の制度があって女性が独立してその技術を支えていたことなどがあり、今後はこうした女性の持つ役割について史料を集めてみる必要があるものと考えられよう。



次に前節においてわずかしかふれなかった写真資料についてふれておきたい。関係する写真は二点である。

その第一は、該遺跡の南方、豊陽館上方から下町橋(現豊岡橋)を撮影したもので、その遠景に四山社(直入製糸場)の姿を留める貴重な資料としてよい。橋の向う(上流)に土蔵造二階建の建造物が見えるが(矢印)、これがあるいは火災後の一八九八年に建造した、工女室兼事務所(桁行八間・梁行五間)で、右半分一階が事務所ではあるまいか。その手前の破風を持つ屋根は製糸場・その右手の小建造物は汽罐室の可能性がある。この写真は一九〇九年の豊岡小学校改築以前の撮影のものであろう。

第二は古町橋(現竹田橋)を撮影したもので、橋のやや下手に川を斜めに横切る低い井堰が見える。この井堰は岩盤に柱穴を穿って竹網代を組み、石を填めた構造のように見えるが、井堰左手(竹田側)から水路を通して水車に導かれるものである。

最後に極めて私事ながら、筆者の祖母は一九四五年に亡くなるが、その直前に幾度か「四山社」という言葉を口にした。祖母の夫は四山株式会社経営破綻発覚当時の非常勤取締役の鳥養光三郎である。当時まだ、国民学校の四・五年生であった筆者にはその意味するところを理解できなかったが、光三郎が四山

社に関係していたことを知らせたかつたのかも知れない。

そして約五〇年の後、遺跡の発掘がおこなわれ、以降に資料調査をすすめるが、県教育委員会発掘担当者、筆者とともにおこなった高校生の史料調査は、筆者が初代の部員であり、同時に指導者を勤めた竹田高校民俗部の関係者である。こうした本稿の完成は、祖母から与えられた五〇年間にわたる宿題を果すこととなるもので、ひとしお深い感慨を覚えるものである。

追記 一九九五年、竹田市文化財課によって更に該遺跡の発掘がおこなわれ、報告書が刊行された。この中に、本稿をもととして内容を増し、資料等を多く収載した施設に関する特論を加えておいた。（『四山社製糸施設の文献研究』鳥養孝好 『四山社製糸工場跡発掘報告書』竹